

ポジティブなステレオタイプのネガティブな響き

—Siy & Cheryan (2016)の追試—

○野中りょう¹・小川 葵¹・矢吹 圭¹・船田紗緒里¹・森永康子²

(¹ 広島大学教育学部・² 広島大学大学院教育学研究科)

これまで偏見や差別とネガティブ・ステレオタイプ(NeST)の関連については論じられてきたが、近年、ポジティブ・ステレオタイプ(PoST)と偏見や差別との関連も検討されるようになった。例えば、Siy & Cheryan (2016)はPoSTを使って他者を褒めると、発話者がNeSTも持っていること、その過程を知覚者の脱個人化の感覚が媒介すること、そして、NeST知覚によって発話者を差別的だとする評価をもたらすことを見出した。本研究では、彼らの追試を行い(研究1)、参加者の好意的性差別態度(BS)による調整効果を検討した(研究2)。

研究1

方法 参加者:男女大学生 164名(女性 81名)。手続き:シナリオを提示し、その後、従属変数への回答を求めた。シナリオは男女ごとに2種類を用意し、登場人物の「女性は協調性があるから」といったPoSTを含む発話がある(vs.ない)場面を提示した。測度:発話者がNeSTを持っている程度の推測(NeST 5項目, α 係数により使用項目を選択), 参加者の脱個人化の感覚 3項目(α s > .82), 発話者に対する差別知覚 1項目(全て 5件法), 発話者の性別の推測 1項目。

結果と考察 男女ともにシナリオによって測度の差異が見られた($ps < .05$)のために、シナリオごとに分析を行った。本報告では、PoST有無によりNeSTの差異が見られた女性のシナリオ2の結果について報告する。なお、他のシナリオはPoSTの有無により脱個人化や差別知覚に差が見られる($ps < .05$)が、NeST知覚には差が見られなかった($ps > .10$)。

PoSTの有無により、NeST($p = .009$), 脱個人化($p < .001$), 差別知覚($p = .059$)に差異が見られた(表1)。媒介分析を行ったところ(図1, 2), いずれも有意な媒介効果が見られ、Siy & Cheryanの結果が再現された。

表1 女性のシナリオ2における平均値

	NeST	脱個人化	差別知覚
PoST有	2.79(0.88)	3.56(1.23)	3.39(1.33)
PoST無	2.15(0.55)	2.27(0.74)	2.68(0.89)

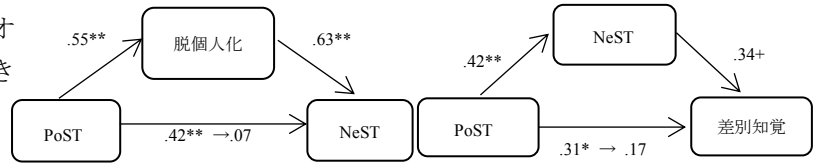


図1 脱個人化の媒介効果

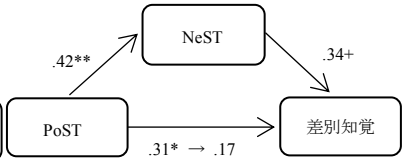


図2 NeST知覚の媒介効果

研究2

研究1の女性対象のシナリオ2を用いて、BSの調整効果を検討した。

方法 参加者:女子大学生 35名。手続き:シナリオの提示後に、NeST($\alpha = .55$), 脱個人化の感覚($\alpha = .75$), 差別知覚, フィラー, BS(8項目, $\alpha = .75$), 発話者の性別を尋ねた。

結果と考察 脱個人化と差別知覚はPoSTの有無による差異が見られた($ps < .001$)が、NeSTには差が見られなかった($p = .51$)。また、SEMにより、BSの調整効果(BSとPoSTの主効果と交互作用)を検討したが、有意なBSの効果はなかった。脱個人化の感覚と差別知覚にはPoST有無の効果が見られた($ps < .01$)。

総合考察

研究1では、一つのシナリオにおいてのみであるが、Siy & Cheryan (2016)の結果が再現され、PoSTがネガティブな効果をもたらすプロセスが確認された。他のシナリオではPoSTによって脱個人化の感覚や差別知覚が喚起されるものの、NeSTは知覚されず、想定されたプロセスが実証されなかった。これは、PoSTのネガティブな効果がNeSTを経ることなく生じる可能性を示唆するものであろう。また、研究2では参加者のBSの影響は見られなく、研究1の結果を再現することもできなかった。研究1では発話者を男性と認知する参加者が多かった(PoST有 100%, 無 86.4%)が、研究2では男性と判断した者が少なく(有 65.0%, 無 56.0%), そのためではないかと考えられる。

引用文献

Siy, J.O., & Cheryan, S.(2016). *PSPB*, 42, 941-954.

本研究には、広島大学研究生 董星宇さんも参加した。